

日本脂質生化学研究会

会 報

1981年1月

日本脂質生化学研究会
(JCBL)

56年度会費払い込みのお願い

- 。 昭和56年度会費2,000円を、3月末までにはさみ込みの振替用紙でお払い込みください。

本年度の講演集の作成に必要ですので、明日にせず、今日お払い込みください。

- 。 振替用紙は1人1枚お使いください。不足の場合は郵便局の窓口で揃えつけの用紙をご利用ください。

会費送付先

振替番号 東京4-91400

日本脂質生化学研究会

- 。 本年度より入会希望の方は、事務局までハガキでご一報ください。そして、入会金1,000円+昭和56年度会費2,000円=合計3,000円を前記同様に郵便振替でお送りください。なお、振替用紙通信欄に新入会とお書きください。
- 。 本年より退会なさる方は、ハガキでご一報ください。

(事務整理の都合上、2年間滞納の場合は自動的に退会扱いといたします。)

- 。 本会報の受け取り人が、海外へ出られたり或いは、他の場所へ転出された時は、お手数ですが返送または、転送をお願いします。

事務局 東京都板橋区加賀2-11-1 (〒173)

帝京大学医学部第一生化学教室

日本脂質生化学研究会事務局

TEL (03) 964-1211

内線 2320

2321

..... 今日、お払い込みください

第23回日本脂質生化学研究会のお知らせ

- ① 場 所 近畿大学（東大阪市小若江3-4-1）
期 日 1981年7月3日（金）～4日（土）
実行委員 林 陽 教授（近畿大学・理工学部・化学教室）

② 研究集会参加費用

参加費 2,000円を予定しています。

③ 懇 親 会

研究会第一日の発表終了後にいたします。

会場 近畿大学本館地下食堂

会費 2,500円を予定しています。

公開特別講演会（前夜祭）のお知らせ

来る第23回日本脂質生化学研究会に先だって、前夜祭として、本会会員でない関西の研究者の方から、脂質生化学研究への提言と期待をこめた下記の公開特別講演会を開催いたしますので、前日より多数ご参加頂き、ご討論下さるようお願いいたします。

日 時 7月2日（木） 午後4時より約2時間の予定

場 所 近畿大学本館7階ホール（東大阪市小若江）

演題・演者（座長）

1. 生体膜の受容機構とリン脂質

神戸大・医 西塚 泰美 教授

（東京大・薬 野島 庄七 教授）

2. 微生物におけるポリ-β-ヒドロキシ酪酸の代謝

京都大・薬 富田 藤吉 教授

（東京大・医 山川 民夫 教授）

なお講演会終了後、本館地下食堂でビールパーティーを行ないます。

宿 泊 案 内

(1) 公立学校共済組合：なにわ会館

近畿大に最も近く、乗りかえなしでこれますので一番おすすしたい宿泊施設です。但し人数に制限がありますので早目に予約して下さい。予約は6ヶ月前から可能、1泊につき1,000円也の予約金が必要です。

〒543 大阪市天王寺区石川町38-1 TEL 06-772-1441

(近鉄上本町駅徒歩3分)

宿泊室数： 116(うちシングル33、但しバス付は1部屋のみ)

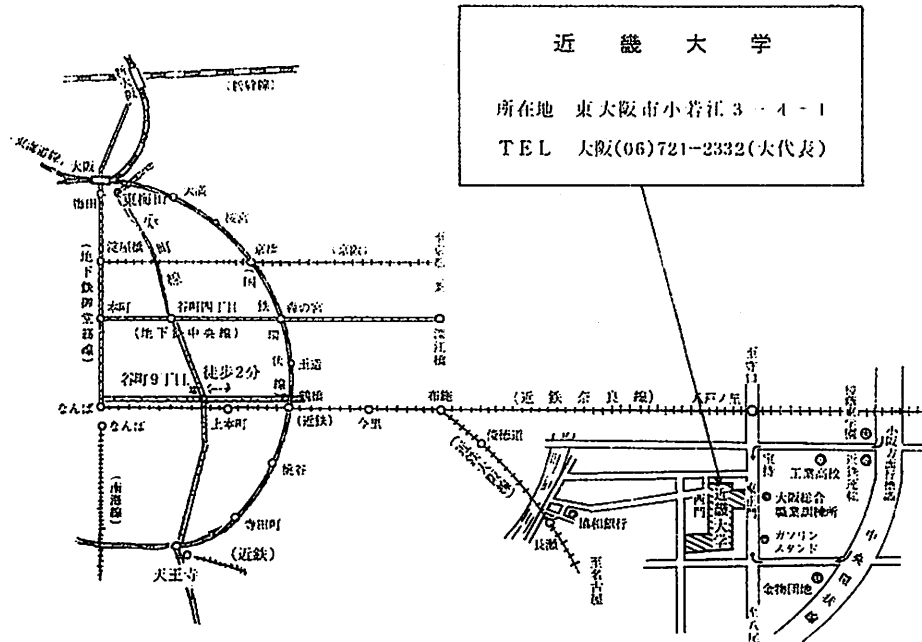
宿泊定員： 約250名

宿 泊 料： 準組合員* シングル 3,000.- ツイン 2,800.-
一般 シングル 3,400.- ツイン 3,100.-

* (国家公務員、私学共済)

(2) 大阪駅附近：国鉄環状線鶴橋駅で近鉄大阪線にのりかえ、または地下鉄谷町線谷町9丁目近鉄大阪線にのりかえ。(谷町9丁目と近鉄上本町6丁目の間は徒歩4分)

道 順 案 内 図



場 所	Tel. (予約)	料金 シングル(ツイン)	客室数 (シングル)
① 新阪急ホテル (国鉄大阪駅前) 大阪市北区芝田1丁目1番35号	〒530 06-372-6600 03-501-2445	5,700.- (9,300.-)	1,029
② 東急イン (大阪駅から 徒歩7分) 大阪市北区堂山町2-1	〒530 06-314-1090 03-462-0109	5,400.-** (8,000.-)	402
③ OSホテル (地下鉄 東梅田駅前) 大阪市北区曽根崎2丁目11番5号	〒530 06-312-3331 03-501-2445 ~3 ~7	4,900.-** (7,500.-)	283 (273)
④ 大阪シャンピア ホテル 大阪市北区南堀町6番23号 (地下鉄東梅田 へ徒歩6分)	〒530 06-312-1751 03-583-1001 076-25-3583	4,800.-** (8,000.-)	300 (264)

(3) 難波附近：近鉄線で上本町6丁目または鶴橋でのりかえ

① ホテルイン南海大阪 地下鉄難波、 近鉄 " 28-1 から徒歩2分	〒542 06-213-8281	7,500.- (13,000.-) 但しダブルベッド	230 (129)
② ホテル南海 地下鉄難波、 近鉄 " 中1丁目17-11 から徒歩2分	〒556 06-632-1557 03-571-4269	4,400.-** (7,920.-)	222 (182)

(4) 天王寺附近：国鉄環状線鶴橋駅で近鉄大阪線にのりかえ

① 都ホテル (天王寺駅 ビル内) 110	〒543 06-779-1501 03-572-8301 011-241-3631	バス付4,000.- バス付5,500.- バス付6,000.- バス付8,000.-	150 (16) (40)
② ホテルエコー オーサカ (国鉄天王寺駅前)	〒545 06-633-1141 ~9	4,800.- (7,500.-)	83 (45)
③ 地方公務員 以和貴荘 天王寺駅より 徒歩5分	〒545 06-662-1275	泊2食付 5,000.-	和室のみ

ただし、宿泊料は(1)を除いて1月10日現在で、**印は税、サービス料込みの料金。

この他に大阪共済会館(06-941-6243)などの共済組合関係の施設やビジネスホテルがあります。

研究集会発表演題の募集

今年の研究集会は2会場2日間といたしました。そして一演題すくなくも発表討論含めて20分を予定しますので、発表可能な演題数は約80題になります。申し込み演題数が多い場合には、審査委員によって口頭発表に適切と思われる演題の選択がおこなわれます。予めご承知おきください。尚、このような方法を採用するに至った経緯は、本会報10頁をご参照ください。

① 演題の申し込み 次の形式の発表演題を募集いたします。

(A) 一般演題 発表12分 討論8分

(B) シンポジウム 主題「水棲生物の脂質」

水中で生活している生物という共通点にたつて、脂質の構造や機能について討論し得るもの。

発表25分、総合討論時間を設けます。

申込締め切り 3月31日(火) 必着

例年より1ヶ月程度早くなっていますのでご注意ください。

綴込みの申し込み用紙をご利用ください。

② 口頭発表に適切な演題の審査と原稿用紙の発送

4月15日迄に審査委員によって申し込み演題に順位がつけられます。それによってプログラム編成を4月18日に終る予定です。

審査委員は次の方々です(順不同、敬称略)

赤沼安夫、赤松 稔、猪飼 篤、石塚稲夫、板倉弘重、井上圭三、植田伸夫、遠藤 章、小野畑夫、金子 弘、斎藤国彦、青山洋右、武富 保、内藤周幸、永井克孝、沼 正作、野沢義則、橋本 隆、原島圭二、飯田静夫、穂下剛彦、堀 太郎、牧田 章、山下 哲、山本 章、山本尚三。

審査部門を次のようにいたします。

A. 単純脂質、脂肪酸、プロスタグランジン B. ステロイド、胆汁酸 C. リン脂質
D. 糖脂質 E. リポタンパク質 F. 酵素、代謝 G. 生体膜、物性
H. 病態、栄養 I. その他上記の区分に属さないもの

プログラム編成の結果、口頭発表願える方、および、口頭発表の機会が得られなかった場合でも誌上発表をしたいと、予め意志表示のあった方には、原稿用紙をお送りいたします。(この意志表示は、演題申し込み用紙に記入欄がありますので必ずご記入願います)

原稿用紙の発送は4月20日を予定しています。原稿の締め切りまでに、余裕がありませんから、ご注意ください。

原稿締め切り 5月8日(金) 必着

原稿は例年の毎く、1枚1433字詰4枚とします。誌上発表のみの場合は、更に2枚追加が可能です。記入は黒インクを用い、タイプでも手書きでも結構です。

尚、これも例年のことですが、原稿用紙1枚目の発表者所属、氏名の下に、5行の要約を枠囲みして必ず書いてください。(昨年の講演集をご参照ください。)

③ 研究発表

研究発表は、講演集を十分に活用してください。スライドは講演集に記載できなかったデータ、写真などに限って使用するよう工夫してください。スライドの数を講演時間1分につき1枚以下に制限いたします。尚、会場は講演集が読めるように明るくおこないますので、スライドはコントラストの強いものを準備してください。

④ 演題の申込み、および原稿の送り先

東京都板橋区加賀2-11-1 (〒173)

帝京大学医学部第一生化学教室内 日本脂質生化学研究会事務局

会の活動状況

① 第22回日本脂質生化学研究会研究集会

第22回研究集会は、夏休みにはいった岐阜大学医学部の講堂を会場とし、高橋善弥太氏（岐阜大学医学部・教授・病院長）のお世話で、7月14日、15日の2日間開催された。

研究発表形式は、第20、21回と同様に、一般演題（長時間発表）、簡明演題（短時間発表）およびシンポジウムの三本だてとしたが、演題申し込みが多く、遂に会場数を増やし、三会場とし、全発表申し込み演題を収容した。この状態をふまえて、将来、研究発表会をどのようにしたらよいかという点について、研究会幹事の皆さんにアンケートを求めた（別項参照）。

シンポジウムはリポタンパク質に関し演題を公募して編成し、猪飼、植田両氏が座長をつとめた。演題は臨床的なものも多く、これが、日本のリポタンパク質研究の現状を示すものであろう。このシンポジウムに先だって実行委員長の高橋善弥太氏と東大理学部猪飼篤氏によるリポタンパク質に関する招待特別講演がおこなわれた。いずれも文献学ではない実際におこなっている研究的立場からのレポートだけに、聴衆にこの領域の現状を示すよい内容であったと思う。

一般演題は三会場になったために全部を聴くことは物理的に不可能（勿論、二会場であっても本質的には同じだが）なことはいうまでもない。落ちついて話を聴き、考え、議論をするという雰囲気はだんだん薄らいで来て、慌ただしく会場を往き来するという状態になってしまった。勿論、これは会場設営側の責任では毛頭ない。演題数の多さに、恐る恐るではあったが三会場に踏み切った研究会幹事側の責任というべきであろうが、第二日目の午後には帰りを急ぐ人も多く、最後の方には聴衆が10人程度という、発表者、座長に大変お気の毒な場面も見受けられた。

本研究発表会に参加する会員諸兄弟の中にも、本研究会を単に発表の機会として捉え、自分の発表が終れば、さっさと観光に出向いてしまう人、自分の狭い関係領域だけ聴いて周辺領域に全く目を向けない人も少なくないように見受けられる。

今年の研究集会
定しますので、発
よって口頭発表に
うな方法を採用す

- ① 演題の申し
(A) 一般演題
(B) シンポジ
水中で
発表2

例年よ
繰込み

② 口頭発表に

4月15日迄に
を4月18日に終

審査委員は

赤沼安夫、赤松
金子 弘、斎藤
原島圭二、飯田

審査部門は

A. 単純脂質、
D. 糖脂質
H. 病態、栄養

プログラム編成
発表をしたいと、
題申し込み用紙と
原稿用紙の発行
注意ください。

原稿は例年の
す。記入は黒イ
尚、これも例
必ず書いてくだ

- ③ 研究発表
研究発表
写真などに
制限いたし
ストの強い

- ④ 演題の申し
東京
帝

それを時代の流れというべきか、この領域の拡大発展ととるか、それはさまざまに受け止められよう。

しかし、この研究会発足の当初の姿であった。一会場で、知らない領域の発表をもじっくり聴くという、発表会ではなくて勉強会の形へもう一度戻せないものかと思う。

夏休みにはいったため、岐阜大の医学部の学生さんの姿は見なかったが、外来診療のある日であり、武藤助教授以下、高橋内科の教室の方々に大変な負担をおかけしてしまった。多謝、多謝。

② 第22回日本脂質生化学研究会総会

総会は55年7月15日12時5分より岐阜大学医学部講堂に於いて開催された。総会の次第並び承認内容は次の如くである。

イ、挨拶 原 会長

ロ、昭和54年度事業報告および決算承認の件 植田幹事

55年1月に発行された会報に記載された54年度事業および決算報告について承認を求め、拍手をもって承認された。

次いで舟橋会計監査よりの監査報告が、舟橋幹事欠席につき原会長より代読され、承認された。

ハ、昭和55年度事業計画および予算承認の件 植田幹事

55年度の事業計画および予算について承認を求め、拍手をもって承認された。

ニ、役員改選の件 原 会長

会則に従い、55年12月31日で任期満了する、会長、庶務幹事、会計監査、幹事(55年1月1日に就任した9氏を除く43氏)の改選について審議がなされ、山川幹事より次期会長として現原会長が重任するよう提案がなされ、拍手でこれを決定、原会長も次期も会長を続けることを了承した。次いで原会長より、現庶務幹事、会計監査、幹事の次期への留任が提案され、拍手をもって承認され、文書を以って諸氏の留任の意志を確認した上で、次

期役員をお願いすることにした。次期は、会長、庶務幹事、会計監査については56年1月1日より57年12月31日迄の2年間、幹事については56年1月1日より59年12月31日迄の4年間である。

ホ、第23回研究集会、実行委員の委嘱

原会長より近畿大学理学部・林陽教授にお願いしたい旨の提案が示され、拍手をもって承認された。林教授よりお引き受けいただける旨、ご挨拶があった。

以上全議事は無事終了した。例年のことであるが、出席者が著しく少いのは淋しい限りである。

③ 55年度幹事会

55年7月14日12時5分より岐阜会館に於いて開催され、総会に対する報告事項(54年度事業報告及び決算報告、55年度事業計画および予算案)が審議された。また、演題増多に対する対策が協議され、幹事の意見をアンケートによって集約することにした。

④ 55年度在京幹事会

55年12月11日午後6時半より東京医科歯科大学同窓会館会議室に於いて開催された。議案は①55年度の事業報告と決算の審議②56年度の事業計画と予算の審議③56年度研究集会準備状況の報告であった。

審議は①とからみ、研究集会のあり方について白熱した議論が重ねられ、発表会ではなく、本来の勉強会の面目をとり戻すため、演題制限も止むなしとなり、制限方法も、研究室単位一題にすべきだなど議論が重ねられた結果、演題内容の審査をおこなうことを決定し、審査委員候補者名が挙げられ、その候補者の同意が得られ次第、審査委員名を公表して演題募集をおこなうことにした。

出席者； 赤松 稔、井上圭三、植田伸夫、遠藤 章、金子 弘、青山洋右、永井克孝、野島庄七、原 一郎、原島圭二、飯田静夫、山川民夫、林 陽(実行委員長) (島崎書記)

④ーイ 55年度事業報告および決算報告

1) 会 員 正 会 員 675名 前年比+87

新入会者 121名

退 会 者 34名

賛助会員 21社 22口

名誉会長 1名

名誉会員 6名

2) 第22会研究集会開催

55年7月14, 15日 岐阜大学医学部

実行委員長 高橋善弥太氏

参加人員 436名

演 題 数 シンポジウム 11題

一般演題

12分/5分 61題

簡明演題

8分/5分 64題

計 136題

3) 脂質生化学研究22巻の発行

55年6月20日

本文 473頁

広告 28頁

図書館無償贈呈40冊

4) 会 報 1980年 発行

55年1月30日 22頁

5) 55年度, 千田賞

申請者3名 該当者なし

審査担当 永井, 原, 堀, 山川幹事

6) 55年度決算 別 表

以上の報告は55年12月11日の在京幹事会に提出され了承された。この報告は56年7月3日開催予定の幹事会の承認を得た上で、56年7月4日開催予定の総会に提出される。

④一口 56年度事業計画および予算

1) 役 員 56年度の本研究会の運営は、55年度総会の決議により次の役員によっておこなわれる。

会 長 原 一郎

庶務幹事 植田伸夫

会計監査 舟橋三郎

幹 事 赤沼安夫, 赤松 穰, 猪川嗣朗, 井上圭三

今井 陽, 植田伸夫, 遠藤 章, 大野公吉

奥山治美, 小倉道雄, 小野輝夫, 香月裕彦

金子 弘, 金田尚志, 日下喬史, 楠瀬正道

児島英也, 斎藤国彦, 坂上利夫, 背山洋右

高橋善弥太, 武内 望, 武富 保, 千田信和

内藤周幸, 永井克孝, 野沢義則, 沼 正作

野島庄七, 野田万次郎, 橋本 隆, 林 陽

林 浩平, 原 一郎, 原島圭二, 飯田静夫

平山 修, 藤野安彦, 穂下剛彦, 堀 太郎

牧田 章, 松本 亮, 丸尾文治, 武藤泰敏

村松敏夫, 山川民夫, 山下 哲, 山田晃弘

山本 章, 蔽内百治, 米山良昌

2) 研究集会の開催

近畿大学理工学部・林陽教授が実行委員になって開催される。(詳細は
本会報黄色ページ参照)

3) 講演集の発行

56年6月12日を発行予定日として準備をしている。

4) 会 報 1981年発行

本誌である。

5) 千田賞選考、贈呈(但し56年度贈呈後の残額があれば)

6) 予算案 別表参照

④-ハ 56年度研究集会の準備状況

ここで討論された内容は、10頁の第23回脂質生化学研究会集会の発表形式の変更について、および12頁、第23回研究集会にあたって、をご熟読願いたい。

昭和55年度決算および56年度予算

収 入 の 部 項 目	5 5 年 度		5 6 年 度 予 算
	予 算	決 算	
正 会 員 会 費	1,088,000	1,342,000	1,340,000
入 会 金	15,000	105,000	20,000
賛 助 会 員 会 費	210,000	180,000	210,000
講 演 集 売 上 げ	100,000	220,750	200,000
広 告 収 入	600,000	700,000	600,000
利 子	5,056	6,388	6,388
寄 付 金	0	0	0
雑 収 入	0	0	0
小 計	2,018,056	2,554,138	2,376,388
前年度よりの繰越金	1,268,953	1,268,953	1,389,143
計	3,287,009	3,823,091	3,765,531

支 出 の 部 項 目	5 5 年 度		5 6 年 度 予 算
	予 算	決 算	
研 究 集 会 補 助	200,000	200,000	300,000
会 報 製 作 費	140,000	134,800	160,000
講 演 集 製 作 費	1,300,000	1,466,697	1,500,000
旅 費	50,000	65,000	70,000
郵送料・通信費	400,000	300,851	500,000
事務用品費	20,000	5,570	20,000
会 合 費	80,000	76,280	100,000
謝 金	30,000	50,000	50,000
総 会 経 費	30,000	29,750	30,000
事 務 経 費	100,000	100,000	100,000
雑 費	10,000	5,000	10,000
小 計	2,360,000	2,433,948	2,840,000
次年度への繰越金	927,009	1,389,143	925,531
計	3,287,009	3,823,091	3,765,531

研究集会についてのアンケート結果

原 一 郎

昨年の22回研究集会直後に下記のようなアンケートを幹事の方々にお送りしました。43通の回答を頂きました。いろいろなご意見が書き込まれて居り大変参考になりました。それらのご意見を、いちいち紹介できないのは残念ですが、数値になるものだけを整理してご報告いたします。

本年度は全申し込み演題を受け付け、或る程度の講演時間を確保した結果ご覧のように、二日間三会場ということになりました。

本研究会は、当初一日一会場として発足し、全国の脂質生化学の研究者の勉強会の場としての役割りを果たしたように思います。しかし研究者が増えるにつれ、発表演題数が増加し会期も二日となり第8回(広島)より二会場制がとり入れられ、会員が互いに全部の演題を聞くということが物理的に、できなくなりました。この時、本研究会も質的に大きく変化したというべきでしょう。それ迄は、会員が互いに何をやっているかよくわかったのが、形式的ではありますが、半分はわからなくなったということです。

更に、年を重ねるに従って会員数は増加し、ご承知の如く発表演題数も増え、二日間二会場に収めるために四苦八苦する状態になり、勢い、発表時間の短縮という方向をたどり、短時間発表の導入が更に演題申し込みをしやすくしたためか、演題数増加を更に促進したのではないかと思います。

現況は、当研究会発足当初の未完成な仕事でもよいから研究会の場へ持ち出して、皆と相談しようという精神から遠く離れて、数多い発表の場の一つということになってしまったようです。秋の日本生化学会大会との違いも特に見い出せません。もちろん脂質研究会発足当初とはいろいろな状況が違ってあります。脂質関係の経験者もほとんど全国に涉って活躍し、脂質関係の実験書も多数公刊され、何も脂質研究会を相談の場としなくても差しつかえのない状況が今日では、出来あがっているといつてよいでしょう。

それでは今日の脂質研究会の研究発表会は如何にあるべきでしょうか。

イ. 研究発表会の現況について

- | | |
|-----------------------------|-----|
| 1. 現況で問題はない。研究発表の場として意味がある。 | 1 2 |
| 2. 現況では不満がある。改善すべきである。 | 2 6 |
| 他に意見 | 5 |

ロ. 発表演題の性質について

- | | |
|--|-----|
| 3. きちんと出来あがった研究を発表すべきである。 | 1 1 |
| 4. 研究途上の未完成なものでもよい。それに対する意見の交換が有意義である。 | 2 8 |
| 他に意見 | 5 |

ハ. 演題の申し込み・採用について

- | | |
|--|-----|
| 5. 会員よりの申し込み演題は全部採用すべきである。即ち、会期延長・会場増設を考えればよい。 | 8 |
| 6. 会期・会場のサイズに従って制限すべきである。 | 2 7 |
| 7. プログラム委員会を作って選択をする。 | 1 6 |

- | | |
|---|-----|
| 8. 幹事会でおこなう。 | 5 |
| 9. その他(具体的に書いてください。) | 6 |
| 10. 事実上演題が制限されるよう工夫する。 | 3 5 |
| 11. 年度毎に特定のテーマを決めてそれ以外は採用しない。 | 2 |
| 12. 一演題の発表時間を30分以上とし、それに耐えられる演題だけ受け付ける。 | 3 |
| 13. 一教室(研究単位)の発表演題数2題以下にする。 | 1 9 |
| 14. 発表料(5千円程度)を徴収する。 | 5 |
| 15. その他(具体的に書いてください。) | 1 2 |

ニ. 討論について

- | | |
|----------------------------------|-----|
| 16. 十分に討論がなされなければ研究会の意味がない。 | 3 4 |
| 17. 討論にこだわることはない。発表の場として意味がある。 | 6 |
| ホ. それでは発表時間(講演時間)はどのくらいがよいでしょうか。 | |
| 18. 10分 | 8 |
| 19. 15分 | 1 5 |
| 20. 20分 | 9 |
| 21. 25分またはそれ以上 | 1 |
| 22. 長時間発表・短時間発表があつてよい | 1 9 |
| ヘ. それにつづく討論時間はどのくらいがよいでしょうか。 | |
| 23. 5分 | 2 2 |
| 24. 10分 | 1 7 |
| 25. 15分またはそれ以上 | 1 |
| ト. そして会場数はどうすべきでしょうか。 | |
| 26. 一会場制にすべきである。 | 4 |
| 27. 二会場まで | 4 2 |
| 28. 演題を消化するためには二会場以上でもよい。 | 1 3 |
| チ. では、会期はどうすればよいでしょうか。 | |
| 29. 二日が限度である。 | 3 3 |
| 30. 三日 | 2 |
| 31. 演題を消化するためには三日以上でもよい。 | 3 |

次に、折にふれて耳に入った意見を書き連ねますので賛否をお聞かせください。

リ. 秋の生化学大会とは違った特色を出すべきだ。

- | | |
|-------|-----|
| 32. 賛 | 3 9 |
| 33. 否 | 1 |

ス. 会員が多くなると演題が多くなるのだから会員になる資格を厳しく制限したらどうか。

- | | |
|-------|-----|
| 34. 賛 | 3 |
| 35. 否 | 3 9 |

ル. 基礎研究会と臨床研究会に分割したらどうか。

- | | |
|-------|-----|
| 36. 賛 | 7 |
| 37. 否 | 3 3 |

オ. 脂肪酸研究会、リン脂質研究会、糖脂質研究会などなどに分割したらどうか。

- | | |
|-------|-----|
| 38. 賛 | 5 |
| 39. 否 | 3 6 |

ワ. 東日本脂質研究会, 西日本脂質研究会に分割したらどうか。	1
40. 賛	40
41. 否	4
カ. 会長, 事務局を例えば関西に移して新しい発想で, 会の運営をおこなったらどうか。	31
42. 賛	2
43. 否	37
コ. 日本脂質生化学研究会は, 創立当初の目的を達したのだからいったん解散し, 再び勉強会が必要だという機運を待ったらどうか。	
44. 賛	
45. 否	

第23回研究集会の発表形式の変更について

日本脂質生化学研究会幹事会

日本脂質生化学研究会は会員数が年々増加し, 遂に昭和55年度は, 正会員670名の多きを数えるにいたった。それに伴って, 年一回開催される研究会の演題数も著しく増加し, 岐阜で開催された第22回研究会では, 特別講演を除いても, 総演題数が136にもなり, 遂に三会場に分けざるを得なくなったことは御承知の通りである。勿論, 演題数の増加に対して幹事会としては拱手傍観していたわけではなく, 前回の場合もシンポジウムを計画する一方, 一般演題の講演時間を13分発表と17分発表に分け, 研究会にバラエティを持たせると同時に所定の日数内に終了させる努力がなされてきた。

このように例年, 申し込まれた殆んどすべての演題が研究会で発表されていたのであるが, それも限度が来たので現状を打開するために, 昨年度の幹事会で幹事の先生方に研究会のあり方に関してアンケートを差し上げ, 御意見を伺った結果, 研究会の期間は二日間, しかも多くとも二会場で行うべしとの回答が圧倒的多数をしめた。

このアンケートの結果を踏まえ, 本年度の研究発表会のあり方について, 昨年12月11日に東京医科歯科大学に於て在京幹事会を開き, 種々討議を行った。現在, 年間多くの学会が開催されており, 研究成果を発表する機会は脂質生化学

研究会以外にもかなりあることなど考慮すると, この際, 本会としては研究会としての本旨にもどり発表演題に対して十分な発表時間と討論時間を設けることにより, 研究会を充実させ, より実り多いものにすべきであるという意見が大多数をしめた。その結果, 本年度の研究発表会について, 以下のような大綱を決定した次第である。

- 1) 昨年の幹事アンケートに基づき, 本来の研究会の面目を取り戻すために, 一演題の発表は20分(講演時間12分, 討論時間8分)とする。
- 2) 会場数は二会場とする。
- 3) 会期は二日間とする。
- 4) 従って, 口頭発表の演題数を約80題に制限する。残りは誌上発表として抄録集には掲載する。
- 5) そのために提出演題に対して審査制度を導入する。
- 6) 審査は次の分類で, 在京幹事会で指名された方々をお願いする。

(募集の項参照)

演題を80題に制限するために, その方法論も種々検討され, 「一研究室一演題」案なども論議されたが, 結局, 研究会のアクティビティを下げない方向ということから「審査」案に落ちついたわけである。

勿論, 今回の試みが会員諸兄姉の演題提出権の制約につながることは充分承知しているが, 限られた日程, 限られた会場数という要求を満たしていくためには, 可成り抜本的な対策が必要であったことを, 是非, 御理解頂きたい。

本年7月開催の脂質生化学会実行委員長林陽先生にも討論に加わっていただきその方向で研究会を開催されることになりました。

(野島 記)

第23回研究集会にあたって

近畿大・理工・化 林 陽

この度、第23回日本脂質生化学研究会の研究集会をおひきうけするにあたって、この集會をより稔り多き会にするため、若干の試みを致しますので、それについて説明し、会員の皆様の御協力を賜わりたく存じます。

まず第一に、野島先生からそのいきさつを述べて頂いていますように、2会場2日間で1演題の発表時間20分とし、少しでも所謂マンモス学会的でなく、討論に時間をかける研究会的な雰囲気の集會とすることになりました。たゞこのため演題数を約80題に制限しなくてはならないことは、一面お互いに残念なことであります。

第二に「お知らせ」欄にPRしましたように、西塚、富田両先生による特別講演会を前日の夕刻に行ないます。両先生とも会員ではありませんが、脂質生化学の研究に対する提言とでもいったものを、脂質との接点にまで来られたそれぞれの研究から承れたらと思っています。ご期待の上、前日からのご来会をお待ちしています。講演会終了後、ビールで渴をいやし、夏の宵のひとつときを楽しんで頂く予定です。

第三に「水棲生物の脂質」についてのシンポジウムを行い、陸棲生物と水棲生物で、その脂質の構造や機能に差異・特徴があるのかどうかなどについて掘りさげてみたいと思いますので、奮って演題をお寄せ願いたく存じます。

第四に演題制限による欲求不満を少しでも解消するために Discussion Room を設け、スライドプロジェクター、黒板、飲物などを用意しますので、どうぞ討論に、また休憩にご利用下さい。

第五に懇親会では近畿大学水産研究所(原田輝雄教授)によりつくられた新種のタイであるキンダイや、最近養殖に成功したヒラメなどのフレッシュな味を、水産研究所のある白浜より懇親会当日、直送することにより味わって頂き、討論で疲れた頭を休め、翌2日目への活力として頂く予定でいます。

最後に、このキンダイの紹介をしておきます。キンダイは磯釣りをする人々か

らは「まぼろしの魚」といわれているインダイとインガキダイとを掛け合わせて作った交雑種で、インダイは縞、インガキダイは斑点の模様が体表にあります。交雑種のキンダイは斑点と縞の両方が体表に出ています。インダイは人工ふ化しやすく、繁殖しやすいが成長がおそい性質をもち、一方、インガキダイは採卵がむづかしく、養殖の途中で死亡しやすいが、成長は速いという特徴をもち、この交雑種のキンダイは両親のよい性質を備え、インダイより成長が速く、インガキダイより育ちやすく(死亡率が低い)、繁殖しやすい特徴をもち、かつ商品価値も高い。

昭和44年に近畿大学水産研究所ではじめて作られたもので、多くの投書の中から「キンダイ」の愛称が選ばれました。その意義は近畿大学の「キン」とまぼろしの魚という高い値打があり、その値千金に匹敵することから千金の「キン」とをかけて「キンタイ(鯛)」から「キンダイ」となった次第です。

キンダイは繁殖能力があり、雑種第2代も出来ており、インダイ、インガキダイのいずれを雌とし、いずれを雄としても子ができるところまでできています。味の方は、ご自分で味わわれた上で、ご批評下さい。

終りに第23回研究集会を総りあるものとするため、会員の皆様の御協力を再度お願いする次第です。

ガングリオシドの生理活性をめぐって

ニューヨークシンポジウムに出席して

東大医科学研究所

永井克孝

昨年(1980)の11月17, 18日の2日間に亘って、コロンビア大学で開かれた Two Day International Symposium on "Gangliosides in Neurological and Neuromuscular Function, Development and Repair" に出席しましたので、その時のお話でもいたします。組織委員長は Maurice M. Rapport で、シンポジウムの主旨として、"The hard information derived from chemistry and biochemistry has received adequate attention recently, and the question now is whether there is sufficient soft information to yield a critical mass capable of generating sustained biological interest." とあります。提出された演題に興味のおありの方もいるかと思しますので、以下に記します。

M.M. Rapport, Ph.D.
Session Chairman

M.M. Rapport, Ph.D.
Introductory Remarks

D.P. Purpura, M.D.
Aberrant Neurite and Spine Generation in Mature Neurons in the Gangliosidoses

M. Willinger, Ph.D.
The Expression of GM1 Ganglioside during Neuronal Differentiation

N.H. Bass, Ph.D.
Gangliosides as an Index of Synaptic Perturbations in Cerebral Cortex during Development and Aging

Y. Nagai, Ph.D., D.M. Sc.
Session Chairman

G. Toffano, Ph.D.
Changes in Functional Properties of Neuronal Membranes by Insertion of Gangliosides

J.W. Daly, Ph.D.
The Effect of Gangliosides on the Activity of Adenylate Cyclase and Phosphodiesterase from Rat Cerebral Cortex

H. Tamir, Ph.D.
Enhancement by Gangliosides of the Binding of Serotonin to Storage Proteins

D. Kostic, M.D.
Changes in Ganglioside Patterns of Brain Following Pentylene-tetrazol Induced Convulsions

S.E. Karpiak, Ph.D.
Effect of Gangliosides and Anti-Ganglioside Serum on Seizure Activity

M.M. Rapport, Ph.D.
Specificity of Anti-Ganglioside Serum in the Perturbation of CNS Functions

L.P. Rowland, M.D.
Session Chairman

R.W. Ledeen, Ph.D.
Implications of the Distribution and Transport of Gangliosides in the Nervous System

G. Tettamanti, M.D.
The Fate of Exogenously Administered Brain Gangliosides

W. Lang, M.D.
Pharmacokinetic Studies with Four Tritium Labeled Gangliosides

G. Pozza, M.D.
Diabetic Neuropathy: A Diagnostic and Therapeutic Approach with Gangliosides

W.K. Engel, M.D.
Potential Role of Gangliosides in the Treatment of Neurological Disorders

S.E. Karpiak, Ph.D.
Session Chairman

W. Seifert, Ph.D.
Gangliosides in Nerve Cell Cultures: Exogenous Effects and Endogenous Changes During Differentiation

W. Dimpfel, Ph.D.
Fiber Outgrowth in Cultured Neuroblastoma Cells Induced by Gangliosides

F.J. Roisen, Ph.D.
Ganglioside Stimulation of In Vitro Neuronal Maturation

H. Dreyfus, Ph.D.
Developmental Aspects of Ganglioside Metabolism in Cultured Neurons

A. Gorio, Ph.D.
Enhancement of Motor Neuron Sprouting During Reinnervation by Treatment with Exogenous Gangliosides

B. Oderfeld-Nowak, Ph.D.
Effect of Chronic Ganglioside Administration on Recovery Processes in Rat Hippocampus after Brain Lesions

A. Bignami, M.D.
Observations on the Effect of Gangliosides on Axonal Sprouting in Spinal Cord

演者の顔ぶれをみますと、ヨーロッパ系と米国系の人々が半々といった感じで、従来のガングリオシドについてのシンポジウムとはかなり趣きを異にしています。演題の内容についてはここでひとつひとつ取り上げませんが、このシンポジウム

の狙いのひとつは、ガングリオシドの神経系への薬理効果を論ずることに在ったようです。ガングリオシドが末梢神経系の損傷の回復 (regeneration と reinnervation) に効果があるという研究は、イタリアのミラノ大学の薬理学教授 B. Ceccarelli のグループが中心になって 1970 年代に入って開始され、これまで進められてきました。1975 年 8 月イタリアの Cortona で開かれたガングリオシドシンポジウムでその詳細が報告されています (cf. Ceccarelli, B. et al. Effects of brain gangliosides on functional recovery in experimental regeneration and reinnervation, In "Ganglioside Function: Biochemical and Pharmacological Implications", (ed. G. Porcellati, B. Ceccarelli & G. Tettamanti), p. 275-293, Plenum Press, 1976)。

我が国でも小幡、大出、飯田が鶏胚の *in vitro* 培養系を用いて、グロボシドやガングリオシド (GMI) が、神経-筋接合の形成を低濃度で促進し、高濃度で阻害することを報告しています。(K. Obinata, M. Oide and S. Handa, Effects of glycolipids on *in vitro* development of neuromuscular junction: Nature 266, 369-371, 1977)。この論文はその後方々で関心をもたれ、問題になっているようです。他方金魚の眼神経の再生系を使って、この問題を検討した H. Rahmann などは、ガングリオシドの効果に疑問を持っているようです。このシンポジウムで、例えば A. Gorio が *in vitro*, *in vivo* 系を用いて、外から与えたガングリオシドが運動神経系の再生促進に大変有効であるとの報告を行ないましたが、これに対して賛否入り乱れての白熱の討論となり、時間が足りなくなってしまったほどでした。

私共と現在共同研究を進めているパリの Salpêtrière 病院の生化学部門の N. Baumann や神経病理部門の J. J. Hauw は、モルモット spinal ganglia の *in vitro* 培養系で、ガングリオシドが neurite の長さの伸長には影響しないが、その数を明らかに増加させる、と云っています。この場合もその効果は或る特定の低い濃度範囲でのみ観察され、面白いことにその範囲はほぼミセル形成濃度 (c. m. c) に相当しているようです。しかし、効果は、脳の total gangliosides のみでみられ、精製した GMI やモノー、ジー、トリ

シアロ分画では認められませんでした。イタリアのグループの研究は、これまで total gangliosides 分画 (おそらく Folch の upper phase) でのみ行なわれてきています。このシンポジウムでは、結局脳の total gangliosides 分画に、少なくとも *in vitro* 培養系で効果が認められることについては一応のコンセンサスが得られたようです。しかし、では果して、その活性の真の物質的本体は何かという点については、これからの問題として残されました。イタリアのグループはいろいろなガングリオシド分子種の組み合わせそのものに、活性があるといった考えをもっているようです。しかし、未同定の特殊な高級ガングリオシドが活性分子かもしれませんし、あるいは total gangliosides なる分画に 雑物として入ってくる非脂質分子、例えば蛋白質、ポリペプチド、ペプチドなどがそうかもしれません。この可能性は大いにありそうです。いずれにせよ、ヨーロッパではガングリオシドが末梢神経系障害の治療剤として用いられていると聞きます。

私は以前 1976 年にガングリオシド (GD1a や GMI) で家兎を強力に免疫すると主として末梢神経組織に脱髄を伴う強い変性が惹起されることを見出し、これを ganglioside syndrome と名づけました。もっとも、これは日本白色種という特定の系統の家兎にのみ頻発し、普通用いられる Hartley 系では起きません。これには遺伝的背景が重要な要因となっているようですし、免疫法も、フロイドアジュバント法を用いて何回も免疫するという強力な免疫操作を必要としました。ところで、今回ののは、これと異なりガングリオシドが薬になるというわけですから、はさみと何とかは使いようということなのかもしれません。この問題の今後の行く末を見守るといったところです。

会場で、ジョンズホプキンス大、Joho F. Kennedy 脳研究所の助教授である河村成子博士とお会いしましたが、新しく大きな grant を取れそうで益々元気に御活躍しておられるのは、嬉しいことでした。また、同研究所の岸本安生博士はこのたびジョンズホプキンス大正教授に昇任されたということで、これもまた大変喜ばしいことでした。岸本教授は、本脂質研究会にも以前から関係してこられ、多くの日本人がお世話になっており、日本の我々にとって心強い限りです。

あとで河村助教授からいただいたお手紙の中に記してあったこのシンポジウムについての感想では、“未完成、未解決の問題が提起されて面白いシンポジウムでした”ということで、何か日本脂質生化学研究会の在りし日の姿(?)を想い出しました。

ところで、新年早々の1月21, 22日に、これも奇しくも Two Day Workshop の、「細胞構築と識別反応に関与する糖脂質」(文部省科研費特定研究「生体膜」の総括班主催)が、山川民夫教授のお世話で東京「駒場エミナース」で泊りがけで開かれようとしています。時間が足りなくなるほどの盛会を期待したいところです。

ニューヨークでのシンポジウムのあと、久しぶりにいろいろな大学を訪ねましたが、出かける前に聞かされた研究費削減におののく米国研究者といった感じはそれ程なく、依然として活気に満ちているようでした。もっとも、これも相対的な問題でありましょう。先年日本に約1年程滞在されたエール大の Robert K. Yu 教授に東海岸滞在中、心暖まるお世話を受けましたが、同教授から日本脂質生化学研究会の会員の皆様に呉々もよろしくとの伝言がありましたことをお伝えいたします。エール大の同教授の個室の壁に、彼の恩師である Herbert E. Carter 教授と並べて山川民夫教授の大きなポートレート写真が掲げられてあったのは印象的でした。この写真を何時もみて研究に励むのだ、というのが同教授の言でした。

お 知 ら せ

第23回国際脂質生化学会(I C B L)が1981年8月2日-5日、デンマークで開催されます。

トピックは

I. 必須脂肪酸、哺乳動物に於る必要性

プール及びプロスタグランディン生合成への利用

II. 脂肪酸及びグリセロリピドの生合成

で、Iについては J.F. Mead, P. Neadleman, P.W. Majerus, B. Samuelsson による招待講演が行われる。IIに関しては J.W. Porter, D. Saggerson, P.K. Stumpf, R.K. Ockner, J.L. Harwood が講演し、I, II共に Short Communication と Poster Presentation の形の一般発表が予定されている。申し込み締切りは1981年4月1日です。講演会場はコペンハーゲンから列車で2時間半離れた“Nyborg”です。

連絡先は Dr. Jens Knudsen
Institute of Biochemistry,
Odense University Campusvej 55,
DK-5230 Odense M,
Denmark

第6回国際複合糖質シンポジウムの御案内

第6回国際複合糖質シンポジウムが1981年9月20日(日)から25日(金)まで東京で開催されます。

糖タンパク質、糖脂質、プロテオグリカンなど糖質を成分とする複合高分子の領域における国際的研究の交流を目的として、1964年第1回シンポジウムがアメリカの Swampscott で開催され、その後1973年フランスの Lille で

第2回会議、1975年イギリスの Brighton で第3回会議、1977年アメリカの Woods Hole で第4回会議、更に1979年には西ドイツの Kiel にて第5回会議が行われてきました。

今回は東京都千代田区平河町の日本都市センターを会場に9月20日(日)から25日(金)まで行われます。トピックスとしては次の3項目が取りあげられます。

- A) Structural analysis of glycoconjugates
- B) Metabolism of glycoconjugates and its disorders
- C) Functional analysis of glycoconjugates

発表形式としては口頭発表とポスター展示が行なわれますが、前者は150題弱の予定です。演題を出されたい方は1981年3月31日までに標題と100語(英文)以内の概要を提出して下さい。講演要旨集は大会当日に学会出版センターより出版されます。その原稿は5月31日までに提出していただきます。

大会参加費は以下のようになっています。

	(5月31日以前)	(6月1日以降)
一般参加者	25,000円	30,000円
学生参加者	16,000円	20,000円
同 伴 者	8,000円	10,000円

演題を出される方は5月31日までに参加費を払込んでいただきます。

Second Circular は1月中旬に配布されましたが、興味をお持ちの方は下記まで御請求願います。

〒113 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学薬学部 生体異物免疫化学教室

大 沢 利 昭

電話 03(812)2111(内線4870)

編 集 後 記

新しい年も早やひと月が過ぎました。昨年は冷夏に悩まされ、また例年にない豪雪に泣かされておられる各地の方々にお見舞申し上げます。

それとは全の対照的に1月の雨量が10ミリにも満たない東京などの異常乾燥。文明がいくら進んでも自然とかかわり合っていかなければならない人間の宿命のような気がします。

加えて郵便料金の値上げなどのダブルパンチの年あけでした。努力のいかなく本会報の発送が値上げ前には間に合わず、会員の皆様にご迷惑をおかけしました。

今年の研究集会は近畿大の林 陽教授のお骨折りで7月に開催されます。先生の記事にありますように、活発な研究会と、それともうひとつ『キンダイ』との初対面を楽しみにしております。

研究会の講演応募、発表形式などより良い方法をとるために毎年試行錯誤いたしておりますが、本文等よくお読みのうえ、ご理解下さい。

(事務局 記)

賛 助 会 員 (5 0 音 順)

エーザイ株式会社
株式会社大阪細菌研究所
株式会社大塚製薬
小野薬品工業株式会社
共立出版株式会社
三共株式会社
塩野義製薬株式会社
株式会社資生堂
第一製薬株式会社
大日本製薬株式会社
株式会社東京化学同人
東京田辺製薬株式会社
富山化学工業株式会社
株式会社中山書店
日本新薬株式会社
日本凍結乾燥株式会社
日本ルセル株式会社
藤沢薬品工業株式会社
株式会社ヤクルト本社
山之内製薬株式会社
雪印乳業株式会社

以上21社